

〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-138- (2面)
- ・酪肉近 見直しへ広く意見募集 (3面)
- ・一世からの開拓地を後世に
一兵庫三田市・旭開拓入植記念の会 (4面)
- ・農場拝見 桃太郎農園(島根) (5面)
- ・乳牛 趾皮膚炎、趾間皮膚炎対策
-サリチル酸ワセリンが効果 (6面)
- ・甘草給与で増体効果や免疫力向上 (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

開拓情報

発行所
公益社団法人全国開拓振興協会
〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10
TEL 03-6268-9995
FAX 03-6268-9996
ホームページ <https://www.kaitakusya.or.jp>
全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集



東京会場で挨拶する新津会長

顔の見える畜産専門連として 全開連24年度事業計画案

全国開拓農業協同組合連合会(全開連)は10月30日、東京で第76回通常総会を開催する。総会に先立ち、10月3日に本所会議室で北海道・東北・関東・中部関西地区の、4日には熊本県人吉市で九州地区の「事業概況説明会」を開催。総会提出の議案が会員に説明され、意見聴取が行われた。

第1号議案は第76年度事業計画案(全開連)は10月30日、東京で第76回通常総会を開催する。総会に先立ち、10月3日に本所会議室で北海道・東北・関東・中部関西地区の、4日には熊本県人吉市で九州地区の「事業概況説明会」を開催。総会提出の議案が会員に説明され、意見聴取が行われた。

第2号議案として示される第77年度事業計画(案)では、開拓組織の「顔の見える畜産専門連」としての優位性を最大限に発揮した生産・販売事業を展開する、として次のような基本方針を示した。

【基本方針】

- (1) 会員と一体となった専門農協としての強固な組織づくり
- (2) 生産性向上のための目標に沿った経営・技術指導の実施
- (3) 低廉・良質な生産資材の開発と供給
- (4) 部分肉の国内外での有利販売体制の強化
- (5) 業務の効率化による経営体質の改善
- (6) 会員との事務処理の共通化による事務効率化

最新技術と生産方式をセットで申請

スマート農業技術活用促進法が施行

スマート農業技術活用促進法※の概要

※農業の生産性の向上のためのスマート農業技術の活用に関する法律

農業者の減少等の農業を取り巻く環境の変化に対応して、農業の生産性の向上を図るため、

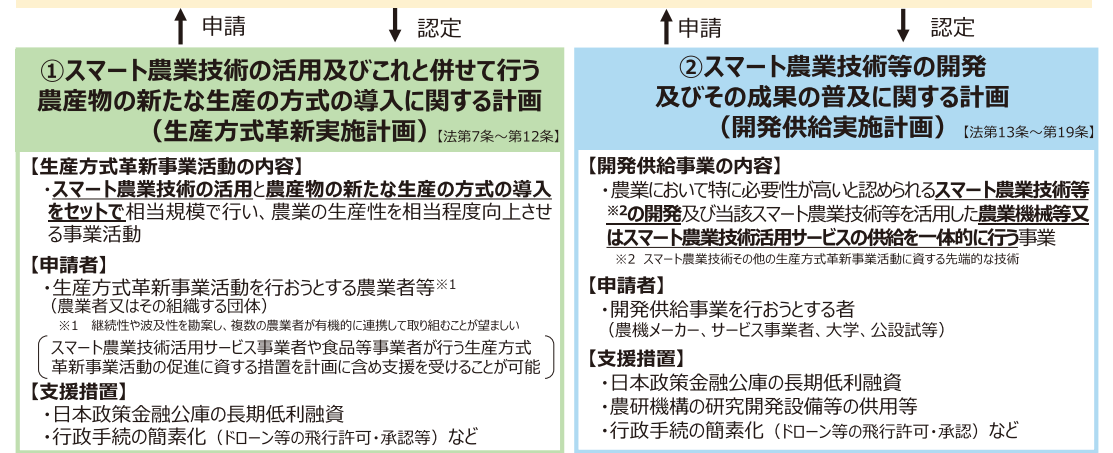
- ①スマート農業技術の活用及びこれと併せて行う農産物の新たな生産の方式の導入に関する計画(生産方式革新実施計画)
- ②スマート農業技術等の開発及びその成果の普及に関する計画(開発供給実施計画)

の認定制度の創設等の措置を講ずる。

農林水産大臣(基本方針の策定・公表)

【法第6条】

(生産方式革新事業活動や開発供給事業の促進の意義及び目標、その実施に関する基本的な事項等)



今年の通常国会で成立した「スマート農業技術活用促進法」が10月1日に施行され、同日から金融・税制等の特例措置を受けるために必要となる、計画認定の申請受付が開始された。

本法は、農業の生産性の向上を図るため、生産方式革新実施計画と「開発供給実施計画」の2つの認定制度を設けるものであり、認定を受けた農業者や事業者は、金融・税制等の特例措置を受けることができる(下図)。

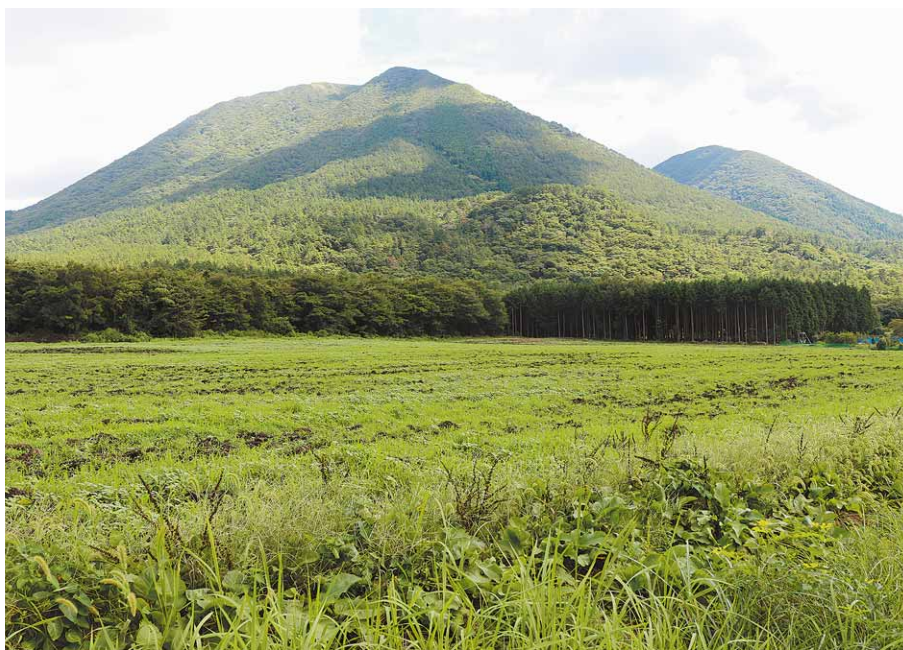
2つの認定制度のうち、農業者などが申請する「生産方式革新実施計画」について、メリットや認定要件を紹介する。

「生産方式革新実施計画」とは、スマート農業技術の活用とセットで、新たな生産方式を導入して農業の生産性を向上させることができる(下図)。

2つの認定制度のうち、農業者などが申請する「生産方式革新実施計画」について、メリットや認定要件を紹介する。

「生産方式革新実施計画」とは、スマート農業技術の活用とセットで、新たな生産方式を導入して農業の生産性を向上させることができる(下図)。

日本神話に登場する三瓶山 島根県・三瓶開拓



島根県大田市にある三瓶山は、中国地方では2つある活火山のうちの1つで、大山隠岐国立公園に指定されている。出雲国風土記に国引き神話として登場する山だ。周辺には三瓶温泉や草原地帯など多くの自然があり、1年を通して様々なアクティビティが楽しめる。陸軍の演習跡地に、46年から入植が始まり、現在は三瓶開拓農協が地域の開拓者の要となっている。写真は、三瓶山西麓の牧草地からの風景(9月17日撮影)。

地域には牧草地が広がっており、同農協の酪農家が、牧草の自給と、景観維持に努めている。

せる計画のこと。例えば、①直播ドローンの活用+直播性の高い品種の導入、②搾乳ロボットの活用+フリーストール式畜舎の導入など。

【メリット】

- ・日本政策金融公庫から長期低利の融資が受けられる。償還期限を25年以上とする等、大規模融資にも対応。据置き期間を5年以内とし、事業者の初期償還負担を軽減。貸付金の使途に長期運転資金も設定。
- ・設備投資の際、税制上の優遇措置が受けられる。機械の取得等をした場合に、特別償却を適用。また、特別償却により、導入後5年以内で設定可能。

【主な認定要件】

- ・規模の要件(相当規模)は、本事業活動で取り組む品目における、申請者の作付面積等のおおむね過半を取り組むこと。
- ・計画の目標(相当程度)は、計画全体で農業の労働生産性を5%以上向上させること。事業実施前と比較し、所得が維持またはプラスとなること。
- ・実施期間は、原則5年以内(果樹等の植栽または育成を伴う場合は10年以内で設定可能)。

農水大臣に小里氏起用

石破内閣発足後に衆院解散

自民党の石破茂総裁が、10月1日召集の臨時国会で首相に選出され、同日、石破内閣が発足した。農水大臣には、小里泰弘氏(66歳、自民党、衆院・比例(九州)当選6回)を起用した。

小里氏は慶応大学法学部を卒業後、証券会社に7年務めた。その後、父である小里貞利議員の秘書として、労働大臣秘書官、震災対策特命大臣秘書官、総務庁長官秘書官などを務めた後、05年の衆院選鹿兒島4区で初当選する。

内閣発足後間もない解散で、各党の農業政策が見えてこない。各候補者の主張をよく聞いて投票することが、これからの農業にも重要となる。投票日は27日。

表 24年度の生乳生産量見通し(千t)

	生乳生産量	
	(8月まで実績)	前年比%
4月	635	101.1
5月	656	101.0
6月	616	99.5
7月	606	98.3
8月	592	100.3
9月	582	101.6
10月	605	101.3
11月	585	101.1
12月	614	100.8
1月	622	100.2
2月	569	95.9
3月	640	99.0
第1四半期	1,907	100.5
第2四半期	1,781	100.0
第3四半期	1,805	101.1
第4四半期	1,831	98.4
年度計	7,323	100.0

Jミルク24年度 需給見通し 飲用需要は伸びず

生乳生産量は前年度と同じ

Jミルクは9月27日、24年度の生乳・牛乳乳製品需給見通しを公表した。7月までの生乳生産量データや乳用牛飼養頭数などに基づく、最終予測。

全国の生乳生産量は、前年比100.0%の732万3千tとなる見通し(表)。前回見通し(7月30日)から6万3千t下方修正された。

生乳生産量が下方修正された要因については、北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、

北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、

北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、

北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、

北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、

北海道で昨年夏の酷暑の影響で受胎時期が遅れ、今年5月の分娩頭数が大きく減少したこと、全国で7月の平均気温が18.98年の統計開始以来最も高くなったことがあ

る。8月以降も地域によっては酷暑に見舞われ、生乳生産が減少した一方、北海道では昨年と比べると若干暑さが和らぎ、分娩頭数が増加に転じたこともあり、生産量は回復傾向で推移している。

酷暑が常態化する中、



食料・農業 知っておきたい話 第138回

酪農における地域循環圏の構築は可能か

全中・NHKフォーラムのために準備したQ&Aから考える

(10月12日Eテレ放送) 東京大学大学院特任教授 鈴木宣弘氏

Q 消費者には「危機」が実感できないが、酪農の現場はどのような状況か?

コロナショックによる牛乳需要の低下の一方で、ウクライナ紛争、異常気象の頻発、中国に「買い

負け」る、などで輸入に頼る飼料価格が高騰し、消費減少とコスト高

のダブルパンチに襲われています。また、田舎が拍車をかけて長期化して

います。これまでは酪農家戸数が減っても残った酪農家が規模拡大して

全体の飼育頭数は増えていきましたが、昨年、減少に転じました。

22年の農水省の統計でも、酪農経営の平均所得はマイナス50万円、特に規模拡大して酪農界をリードしてきた200頭以上の大規模層は、頭数平

均で330頭ですが、平均で2100万円の赤字に陥っており、このままですと、子ども達に牛乳

が十分に飲ませられなくなる恐れさえあると思います。

日本の酪農の発展には特質があります。アメリカなどからの大量のトウモロコシを安く輸入する

ことで、輸入飼料を前提にして牛の頭数を拡大して発展してきました。しかし、今回のような世界的な飼料価格の高騰が起ると、経営難に陥るとい

う宿命を負ったということとです。

Q アニマルウェルフェアとは?日本での浸透具合は?

アニマルウェルフェアとは、家畜を劣悪な環境で酷使せずに、できるだけ快適な環境で生活でき

るようになることです。牛では、草原があり、ふかふかの寝床、自由に動

けて、食べて、寝られる、という理想に近い状態です。目先の効率性だけを、牛を搾るだけ搾って病気になるまで早く死んでしまうのは牛にも不幸だし、牛が健康で長生きできるように大事にして

た方が、牛が最大限の力を発揮してくれて、経営としても生産性、持続性が上がるのです。

日本は土地が狭い中で、輸入の餌に頼って、乳牛頭数を増やしてきたから、どうしても一頭当たりの土地やスペース、牧草地が狭くなりがちで、アニマルウェルフェアを進めにくいのが現実かと思

います。

Q コメ利用は可能か?北海道は牧草地の草が

まだ活用できませんが、都府県は難しい。しかし、コメがあります。日本で生産力のあるコメをできるだけ餌に活用する工夫が大切です。

千葉の高秀牧場さんの数値を確認すると(図)、このようにコメ由来の餌の割合を35%まで増やして輸入飼料への依存を1割まで少なくすることに成功していますから、やればできるはず

です。

Q 消費者から酪農家の現状がわかりづらいのは何故か?

生乳の特質です。腐敗しやすい生乳は、個々の酪農家がバラバラでなく、迅速にまとめてメーカーに届ける必要がある

ので、それを行う生産者組織として指定団体があります。酪農家の牛乳の価格形成にも役立つとい

えます。

生乳生産現場での適切な暑熱対策が重要となる。一方、牛乳等生産量(Jミルク需給見通し)においては、「牛乳」「加工乳」「成分調整牛乳」「乳飲料」の4品目を「牛乳類」と定義し、これに「はっ

酵乳を加えたものを「牛乳等」としている。なお、牛乳等の製造量・消費量として捉えられる。(見通しは、牛乳類は前年比98.3%の44万6千kl。はっ酵乳は前年

比2.9%の101万7千klと見込んだ。

飲用需要は価格改定以前の水準まで戻らない。一方、バター需要は12月最需要期の確保のめどが立ってきた。

他方で、本年度前半の生乳生産が伸び悩んだこと等から、業界及び関係者は本年度後半及び25年度の生乳生産は減少していく可能性があるという。このため、通常以上にバター在庫を積み増す動きがあり、出回りが減ることから、本年

度末のバター在庫量は23年度末を下回ると見通されている。

しかし、脱脂粉乳の需要は依然として低迷している。生産者・処理業者が協調して取り組む対策の効果などにより、在庫の積み増しを回避しているが、自然体では単年度の需要量が供給量を下回る状況が続いている。

北海道は牧草地の草がまだ活用できませんが、都府県は難しい。しかし、コメがあります。日本で生産力のあるコメをできるだけ餌に活用する工夫が大切です。

千葉の高秀牧場さんの数値を確認すると(図)、このようにコメ由来の餌の割合を35%まで増やして輸入飼料への依存を1割まで少なくすることに成功していますから、やればできるはず

生乳の特質です。腐敗しやすい生乳は、個々の酪農家がバラバラでなく、迅速にまとめてメーカーに届ける必要がある

ので、それを行う生産者組織として指定団体があります。酪農家の牛乳の価格形成にも役立つとい

えます。

生乳生産現場での適切な暑熱対策が重要となる。一方、牛乳等生産量(Jミルク需給見通し)においては、「牛乳」「加工乳」「成分調整牛乳」「乳飲料」の4品目を「牛乳類」と定義し、これに「はっ

酵乳を加えたものを「牛乳等」としている。なお、牛乳等の製造量・消費量として捉えられる。(見通しは、牛乳類は前年比98.3%の44万6千kl。はっ酵乳は前年

日本は土地が狭い中で、輸入の餌に頼って、乳牛頭数を増やしてきたから、どうしても一頭当たりの土地やスペース、牧草地が狭くなりがちで、アニマルウェルフェアを進めにくいのが現実かと思

います。

Q コメ利用は可能か?北海道は牧草地の草が

まだ活用できませんが、都府県は難しい。しかし、コメがあります。日本で生産力のあるコメをできるだけ餌に活用する工夫が大切です。

千葉の高秀牧場さんの数値を確認すると(図)、このようにコメ由来の餌の割合を35%まで増やして輸入飼料への依存を1割まで少なくすることに成功していますから、やればできるはず

です。

Q 消費者から酪農家の現状がわかりづらいのは何故か?

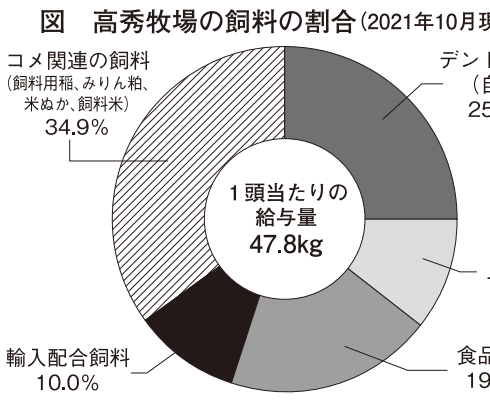


図 高秀牧場の飼料の割合(2021年10月現在)

表 北海道のマイペース酪農家とA農協の経営比較

	マイペース8戸平均	A農協平均
草地面積	60ha	82ha
経産牛頭数	43頭	87頭
購入飼料代	500万円	2,780万円
農業所得	1,957万円	2,413万円
資金返済後所得	1,811万円	1,826万円

飼料・肥料代が10%値上がりした場合の所得(試算)

農業所得	1,896万円	2,109万円
資金返済後所得	1,750万円	1,522万円

まず、牛の頭数を増やせないから総所得が少な

いのが欠点と言われているが、それはそうではない。このデータでもわかるように(表)、飼

料・肥料代が10%値上がりした場合の所得(試算)

農業所得 1,896万円 2,109万円

資金返済後所得 1,750万円 1,522万円

地域で生産されたものをその地域で消費する、地域循環型の食料自給圏、ローカル自給圏を築いていく、とよく話すのですが、野菜やコメなどの農産物に比べて、広域流通が基本で、地場で

必要かと思

経営体の中で一番所得が大きいというデータもあり、新規参入者が順番待ちになっています。

ただ、頭数が増やしつつあるので、こういうタイプの酪農ばかりだと、国民に供給できる生乳の量が足りなくなります。ですから、大規模に大量生産できる酪農家もいてく

る必要があります。酪農もローカル自給圏が強化できると確信しました。

Q 今後、生産者と消費者の距離を縮めていくには、どのようにすればよ

いかな?

最後に一言、提言を

輸入依存を減らして、地域資源を循環させる要素を強化していくことを

地域で生産されたものをその地域で消費する、地域循環型の食料自給圏、ローカル自給圏を築いていく、とよく話すのですが、野菜やコメなどの農産物に比べて、広域流通が基本で、地場で

必要かと思

経営体の中で一番所得が大きいというデータもあり、新規参入者が順番待ちになっています。

ただ、頭数が増やしつつあるので、こういうタイプの酪農ばかりだと、国民に供給できる生乳の量が足りなくなります。ですから、大規模に大量生産できる酪農家もいてく

る必要があります。酪農もローカル自給圏が強化できると確信しました。

Q 今後、生産者と消費者の距離を縮めていくには、どのようにすればよ

いかな?

最後に一言、提言を

酪農・畜産の未来のために

酪肉近 現場の意見・要望を募集

農水省は9月10日、今後の政策方針が必要だ。後10年間の畜産政策の指針となる「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」(酪肉近)の見直しに着手した。20年に現行の酪肉近を策定してから情勢が大きく変化した。酪肉近は、酪農・肉用牛生産の発展や、畜産物の安定供給に向けた施策の方向性を示すもので、およそ5年ごとに見直しを行っている。同省が、食料・農業・農村政策審議会に諮問し、同審議会の畜産部会で議論され、来年3月下旬に決まる予定。

酪肉近の30年度の実績は732万tとなっている。また、牛肉(部分肉換算)の生産量は40万tで、同じく23年度の実績は35万tとなっている(表)。

○生産目標の再設定
現行酪肉近の30年度の実績は78万tで、23年度の実績は73万tとなっている。しかし、このまま増産を目指す必要はない。むしろ、需要が落ち込んでいる。この状況でも増産を目指すのであれば、景気回復や輸出促進など

表 20年に策定した30年度までの目標値

	目標値	23年時点	差
生乳生産量	780万 t	732万 t	48万 t
牛肉	40万 t	35万 t	5万 t

による新たな需要を喚起することが条件となる。また、生産原価の引き下げも重要となる。飼料高に對しては、国産飼料の増産が不可欠となる。生産原価に見合った価格形成の仕組みを構築することも重要となる。

○広く意見・要望を募集
同省では、同審議会畜産部会において議論を進めていく上で、広く国民からの意見・要望を募集している。

今後の酪農・畜産発展のために、現場の生の声が必要となる。締め切りは12月31日。詳細は同省ホームページに。

新規就農者 減少止まらず

農業を魅力ある職業に

農水省は8月30日、23年の新規就農者数が4万3460人と、2年連続で過去最少となったことを発表した。

23年(23年2月1日〜24年1月31日)の新規就農者は前年より5.2%減少し、このうち49歳以下は1万5890人で、同5.8%減少となった(表)。

新規就農者の減少に歯止めをかけるには、農業が魅力ある職業とならなければならない。そのためには「まじめに働けば農業は儲かる」体制を構築していかねばならない。もちろん、農業の魅力は他にもたくさんあるが、生活が豊かにならないと人は集まらない。

内訳を見ると、実家の農業に携わる「新規自営農業就農者」が同3.4%減の3万330人。そのうち49歳以下は21.1%にとどまる。企業の定

新規就農者数の推移 (就農形態別)

区分	計	就農形態別						
		新規自営農業就農者		新規雇用就農者		新規参入者		
		49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	
2014年	65,030	23,030	51,020	12,530	10,430	7,980	3,570	2,520
16	60,150	22,050	46,040	11,410	10,680	8,170	3,440	2,470
17	55,670	20,760	41,520	10,090	10,520	7,960	3,640	2,710
18	55,810	19,290	42,750	9,870	9,820	7,060	3,240	2,360
19	55,870	18,540	42,740	9,180	9,940	7,090	3,200	2,270
20	53,740	18,380	40,100	8,440	10,050	7,360	3,580	2,580
21	52,290	18,420	36,890	7,190	11,570	8,540	3,830	2,690
22	45,840	16,870	31,400	6,500	10,570	7,710	3,870	2,650
23	43,460	15,890	30,330	6,420	9,300	6,880	3,830	2,590

(農水省資料より)

水稲「やや不良」は3県のみ

米価格上昇も生産原価を思えば

農水省は8月15日現在の24年産水稲の作柄概況を発表した。

青森県が唯一「良」で、その他の東北5県と、北海道、北関東の栃木県、茨城県、近畿の大分県、奈良県、四国の徳島県の計11道府県が「やや良」となった。「やや不良」は九州の佐賀県、長崎県、宮崎県の3県で、残りの31道府県が「平年並み」となった(沖縄県は、第2期稲が田植終期に達していないため除外)。

これは、5月以降、総じて天候に恵まれた一方で、田植え後の日照不足などの影響が見込まれる地域があることによる。また、9月27日に公表された、8月31日現在の水稲うち玄米の1等比率は63.7%で前年産の68.9%より5.2%下がった。ただ、登録検査機関からの聞き取りによると、9月については1等比率が前年産と比べて高くなる見込みがある。一方、スーパーでの食

用米販売数量の推移は(POSデータ)、8月8日発表の南海トラフ地震臨時情報により、買いだめする動きが広まり、8月19〜25日の週は前年同期比48.6%増と急激な伸びとなった。その後、今度は米不足との情報とともに、実際に店頭から米が少なくなり、9月23〜29日の週は、同23.8%減と、社会現象となった。

米の価格高騰で大騒ぎになっているが、米の生産原価や、米作りの苦勞を考慮すれば、決して高い価格ではないはずだ。

米の価格高騰で大騒ぎになっているが、米の生産原価や、米作りの苦勞を考慮すれば、決して高い価格ではないはずだ。

都市化の波にも「拓魂」は残る

滋賀県東近江市・八日市開拓



滋賀県東近江市の八日市開拓は、琵琶湖の南東に位置し、湖との間には戦国武将、織田信長が建てた安土城跡がある。

同開拓地は、旧陸軍飛行場跡地で、標高130mほどの比較的平坦な土地である。しかし、滑走

握った鍬の柄は赤く血に染まった。46年冬に46名が入植し、そのほとんどが、旧兵舎での生活となった。その年は異常なまでに降雪が多く、開墾の出鼻を大雪にくじかれた。

ところが、日本経済の

初年度に主に栽培したのはジャガイモやカンシヨだったが、収穫したイモはあまりに小さかった。48年頃より徐々に桃などの果樹を植えていくと、2年後には実をつけるようになった。

50年に揚水機(ポンプ)施設が補助事業で完成し、畑地の水田化が行われた。自分たちの手で収穫した香り高い新米は、格別のものではあった。桃なども、八日市開拓農協のラベルが付いたケースで出荷されるようになった。開拓事業が軌道に乗ってきたのである。53年には役牛が耕運機に変わり、酪農家が急増した。しっかりと「拓魂」は受け継がれている。

開拓組織の動き

- 11月 全開連東日本地区 開拓組織の主な行事は次のとおり。
- 11月 全開連東日本地区 開拓牛枝肉共進会
- 19日 全開連九州ブロック 全開連九州ブロック 講演会(島根)
- 19日 全国開拓振興協会 講演会(島根)
- 19日 女性研修会(島根)
- 19日 全国開拓青年共進会(熊本)
- 5日 九州開拓組織連絡協議会研修会(熊本)
- 15日 開拓ながさき畜産共進会(熊本)
- 19日 全国開拓青年共進会(熊本)
- 19日 全開連九州ブロック 講演会(島根)
- 19日 全開連九州ブロック 講演会(島根)
- 25日 福岡県畜産事務協議会(福岡)
- 29日 宮崎乳肥農協通常総会

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。

「世がらの開拓地を後世に」

兵庫県三田市 旭開拓入植記念の会

兵庫県三田市の旭開拓入植記念の会を主催する。同開拓は、グライダーの滑空場が払下げとなり、軍需工場に配属された。旭開拓農協協同組合の源一夫代表理事組合長の挨拶の後、同長田俊明理事が「一世がら」の歴史をあらためて回顧した。

旭開拓は、1970年の入植25周年に建てられ、同年に記念碑と、旭神社も建てられた。また、50周年記念碑も並んで建てられた。旭開拓農協協同組合の源一夫代表理事組合長の挨拶の後、同長田俊明理事が「一世がら」の歴史をあらためて回顧した。



旭開拓の地は、これからも残していかなければならない」との想い、周年を迎える。

地域横断でイノシシ対策を

寺社仏閣から猟友会まで皆で協力

野生鳥獣は時として、疾病を媒介するなど、様々な悪影響をもたらす。中でもイノシシは、豚熱の感染拡大に影響する厄介な動物である。

「第65回全国家畜保健衛生学発表会」で、農研機構畜産研究部門の平田滋樹氏が、「野生イノシシと豚熱について」と題して特別講演を行った。

講演の冒頭、同氏は、養豚場が無い地域の耕種農家からは、「何故養豚場が無い地域の耕種農家からは、」と疑問を投げかけた。

「何故養豚場が無い地域の耕種農家からは、」と疑問を投げかけた。また、イノシシ対策では、①捕獲強化によるイノシシ個体の減少②豚熱

経口ワクチンの散布によるイノシシへの抗体付与と、効果の調査③サーベランス(注意深く監視する、という意味)の徹底などの対策を、バランスよく行うことが重要であることが訴えられた。

「ナッジ手法」で消毒が危惧されており、参拝客や登山客の防疫も欠かせないことを訴えた。そこで取り入れられたのが、「ナッジ手法」(人々の選択を少しだけ誘導することで、望ましい行動や結果に導く方法のこと)だ。コンビニの足跡シールに自然に人が並ぶ心理などが代表的だ。

野生鳥獣のジビエ利用量は、食肉としての需要増加が顕著である。前年と比較し、シカが35.9%増、影響が大きいと分析している。

好きな野菜1位に再びトマト

機能性野菜にも高い関心

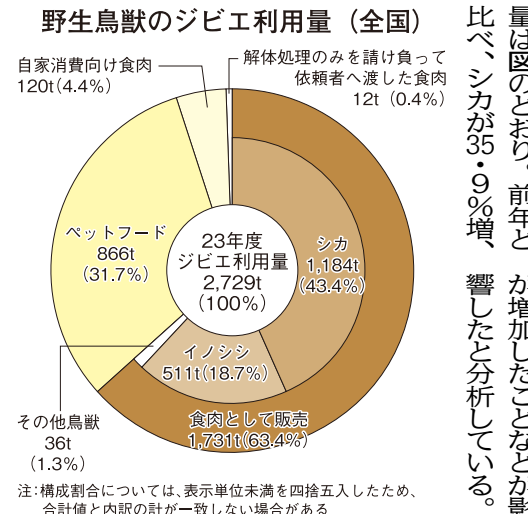
タキイ種苗(株)は8月22日、24年度の「野菜と家庭菜園に関する調査」の結果を公表した。全国の20〜69歳の男女600人から回答を得た。

好きな野菜1位はトマト(71.8%)で、次いでジャガイモ(69.0%)、去年1位だったタマネギが68.7%だった。コロナ禍で健康や免疫への意識が高まり、低カロリーで栄養価が高いトマトの需要につながり再びの1位となったようだ。

「野菜を十分に食べている」は12.8%にとどまった。「野菜を十分に食べる機会が少ない」が23.6%だった。



消毒コーナーの存在を示す看板とポップ。泥落としマットと消毒マットに提示した「足跡マーク」。



食肉としての需要増加

ジビエ利用量3割増

農水省は9月27日、23年度の「野生鳥獣資源利用実態調査結果」を公表した。野生鳥獣のジビエ利用は大きく増加している。

写真・図ともにタキイ種苗(株)の資料から(図は一部抜粋)



こだわりのブドウ生産 島根県大田市 桃太郎農園

縁結びの神様として有名な出雲大社から南西へ車を走らせること約1時間、沿道にカラフルなのぼりを発見。今回お邪魔した、桃太郎農園である。

同農園は、島根県大田市の標高420mほどの三瓶開拓に位置する。46年に初代の田中久道さんが入植。水が無くても栽培できるウメに始まり、55年にモモの栽培を開始。ブドウは74年に初収穫し、その後2020年にモモの栽培を終了。現在はブドウ一筋で経営を行う。

同農園は、全日本開拓者連盟の青年部長を務める甲斐健二さん(51歳)と妻の真里奈さん(46)が、お子さんの大河さん(18)と溪斗さん(17)、父・眞さん(74)と母・孝恵さん(70)と共に家族で管理を行っている。

約45aの園地では、神紅、シャインマスカット、ナガノパープルなど全12品種を栽培。9割ほどは直売所で販売し、残りはネット販売などに回している。神紅については、東京周辺の小売店と直接の取引を開始したところだ。

栽培管理について、最も注意しているのが病虫害で、発生を確認次第、ネ



ットを掛けて農薬を撒くなど、基本的なことを徹底しているそうだ。話題になった果樹カメムシについても、ほかの病気の対策を行っていたおかげで大きな被害は出なかったという。作業用の機械が老朽化しているが、更新をガマンして、今あるもので何とか収益をあげられるように努力している。

農薬の使用は必要最低限に留めているため、農薬アレルギーの方でも買いに來てくれる。獣害が発生した際は、少しでもブドウに触れた形跡がある場合は出荷しないことに決めている。

また、ブドウの皮を剥いたときに果肉部分に色素が残ることがあるが、これは栄養がある部分で美味しさの証し



上：溪斗さん、健二さん、真里奈さん 右下：「神紅」の収穫

とのこと。こうしたこだわりのブドウづくりに取り組んでいる。

今後の目標は、島根県独自の品種である神紅をもっと普及させることだ。神紅とは、皮ごと食べられる赤系の品種で、ベニバラードとシャインマスカットを掛け合わせた新品種。糖度や着色の具合など、非常に厳しい基準が設定されている。ブドウの着色の難しさは青系(黒系(赤系の順とされており、赤系である神紅は最も難しいそうだ。

そんな神紅の知名度を上げるために、健二さんはSNSを活用した宣伝や販売を行っている。その効果は大きく、九州・中国・関西地方のほか、遠方から直売所を訪れる客もいる。ブドウの味を気に入って、何度も訪れるリピーターも多いそうだ。最後に、「美味しいと感じてもらい、直売所まで再び買い求めに來てくれるようなブドウを今後も作り続けていきたい」と健二さんは語ってくれた。

飼料用稲の巨大根系が多量に養分蓄積 減肥と土壌肥沃度維持に貢献

飼料用水稻は、国産飼料の供給とともに水田の有効活用に繋がっている。しかし、水稻に関する科学的な研究は限定的で、特に灌漑水と土壌に覆われた器官である根系の特徴は不明だった。

三重大学の研究グループは、飼料用水稻が通常品種の2倍以上の根系を発達させ、そこに多量のデンプンや窒素成分を蓄積することを明らかにした。

同グループは、飼料用品種の「たちすずか」と「たちあやか」、その比較対象として通常品種を用い、2年間に

わたり栽培試験を実施。これらの品種を異なる条件(窒素施肥法、移植時期、栽植密度)で栽培し、出穂後0日、28日、56日、84~100日目に根系を採取し分析を行った。その結果、以下のような発見があった。

- ① 「たちすずか」と「たちあやか」は、コシヒカリなどの通常品種と比較して2倍以上の根系重量だった。
- ② 両品種の根系は出穂後にデンプンを蓄積し、最大で乾物重の20~25%に達した。これは通常品種の5倍以上の値となる。



写真1:水田から掘り出した水稻根系

コシヒカリ

クサノホシ

たちすずか

三重大学の資料から

- ③ 根系に含まれる窒素量は、通常の基肥施用量に匹敵する7~8g/m²に達した。
- ④ 異なる栽培条件下でも、これらの特徴は同様だった。これは、この現象が遺伝的に発生している可能性を示している。
- ⑤ 従来、イネの穂が出穂後の主要な養分の蓄積場所と考えられてきたが、根系も重要な養分の蓄積場所として機能することが分かった。

巨大根系を構成するセルロースや、そこに蓄積した多量のデンプンは土壌微生物の餌となり、窒素成分は翌年に栽培される水稻の重要な養分となる。同グループは、飼料用水稻を栽培することで、茎葉部を飼料にできるうえ、養分が蓄積した巨大根系により堆肥を施したような効果が発揮されて減肥に繋がるなど、持続的生産や耕畜連携による循環型農業への貢献が期待できるとしている。

農水省は9月18日、「23年産指定野菜(秋冬野菜等)及び指定野菜に準ずる野菜の作付面積、収穫量及び出荷量」を公表した。指定野菜のうち、冬キャベツ、冬レタスの2品目は収穫量が前年と同等だったが、他の全ての品目で減少した。

《指定野菜》

① 秋冬野菜

全体の作付面積は8万4300haで、前年産から2300ha(3%)減少した。収穫量は9万t(3%)減の275万9000t、出荷量は6万4000t(3%)減の229万

天候不順などで全体的に収穫量減少 23年産指定野菜(秋冬野菜等)

6000tとなった。

秋冬野菜に指定されている8品目の収穫量をみると、秋冬ダイコンなどの6品目が前年産より減少した。最も減少幅が大きかったのが秋冬サトイモで、1万2000t(9%)減の12万6600tとなった。夏場の高温や降雨量が少なかった影響で、生育が抑制されて小玉傾向となったためである。

② ホウレンソウ

作付面積は1万8700haで、200ha(1%)減少した。10a当たり収量は1110kgで前年産並み。収穫量は20万6800t、出荷量は17万7100tで、ともに前年より1%減少した。

《指定野菜に準ずる野菜》

全体の作付面積は13万9900haで、前年産に比べ3300ha(2%)減少した。

収穫量は4万6000t(2%)減の215万4000t、出荷量は3万3000t(2%)減の186万2000tだった。

収穫量が増加したのは27品目中6品目で、最も大きく増加したのが、ヤマノイモの4%増だった。

収穫量が減った品目をみると、ソラマメが14%減、カボチャが13%減、と大きく減少している。ソラマメは、鹿児島県などで低温や降雪等の影響で低温障害が発生、カボチャは北海道で高温や少雨などの影響で肥大が抑制され、収穫量が減少した。

乳牛の趾皮膚炎、趾間皮膚炎対策 サリチル酸ワセリンが効果

牛の蹄病に、「趾皮膚炎」「趾間皮膚炎」という、ヒゲイボやイチゴ状の病変をつくる病気がある。蹄葉炎とは別の病気で、病変部位は非常に強い疼痛が出るため、重度の跛行や乳量の低下など、生産性に大きな悪影響を与える。

抗生剤の濫用などの問題や、代替治療に使われていた薬剤が入手困難となり、新たな治療法が求められている。NOSA I 北海道道央統括センター宗谷支所は、人間のイボ治療薬に使われている「サリチル酸」とワセリンを混ぜて患部に塗ることで、趾皮膚炎・趾間皮膚炎(以下、同病)を治療できる

ことを実証した。
◇方法
同病と診断された22症例26肢を供試。患部を洗浄した後、サリチル酸と白色ワセリンを50%ずつ混ぜた製剤(以下、サリチル酸ワセリン)を塗り、1週間単位で包帯を交換した。

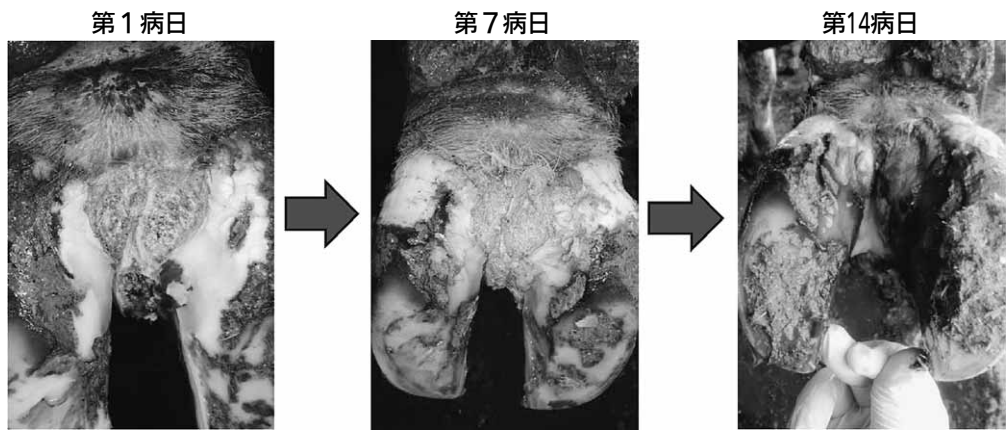
サリチル酸ワセリンの作り方は、ワセリンを湯煎して溶かし30分程度放置し、容量2ℓ程度の容器(タッパー推奨)に入れたサリチル酸の粉末にこれを複数回に分けて投入して混ぜれば作ることができ

る。
治療の判定は、包帯を取った後に病変部をすべて除去でき、奥に皮膚組織が出来ている状態を治癒とした。

◇結果
サリチル酸ワセリンを塗布して包帯を巻いた26肢すべてで100%治癒した。

治療回数は平均2.4±0.6回だった。ワセリンとの混合により、サリチル酸の元の粉末の状態よりも使用しやすくなったという。

サリチル酸ワセリンの塗布は、同病の治療に有効とみられた。今後、最適濃度について検討を続ける予定だ。



サリチル酸ワセリン塗布による回復の様子

NOSA I 北海道道央統括センター宗谷支所の資料から

豚肉内脂肪含量を向上 「アミノ酸比率法」での飼養で

前月号(797号)で紹介した(独)家畜改良センターの奥村寿章氏の講演「豚肉の食味研究の現状とその利用(肉色としまり、脂肪交雑、脂肪質)」では、筋肉内脂肪(以下、粗脂肪含量)が6~8%の豚肉が消費者に好まれる傾向が発表された。豚肉の粗脂肪含量の割合が高まる「アミノ酸比率法」も解説があったため、紹介する。

◇アミノ酸比率法とは

豚肉の食味性が向上する霜降り豚肉の生産技術として、「低タンパク法」「低リジン法」「アミノ酸比率法」がある。低タンパク法と低リジン法は、

発育遅延や肉量低下があるため、あまり実用的ではなく、アミノ酸比率法の有用性が紹介された。

「アミノ酸比率法」は、飼料に含まれるリジン(必須アミノ酸の1つ)を適度(または低め)且つ高タンパク質に調整したものを肥育期の豚に給与することで、発育や枝肉肉質に悪影響を及ぼすことなく、食味に優れた豚肉を生産することができる。飼料成分の工夫により、粗脂肪含量が増加する仕組みだ。

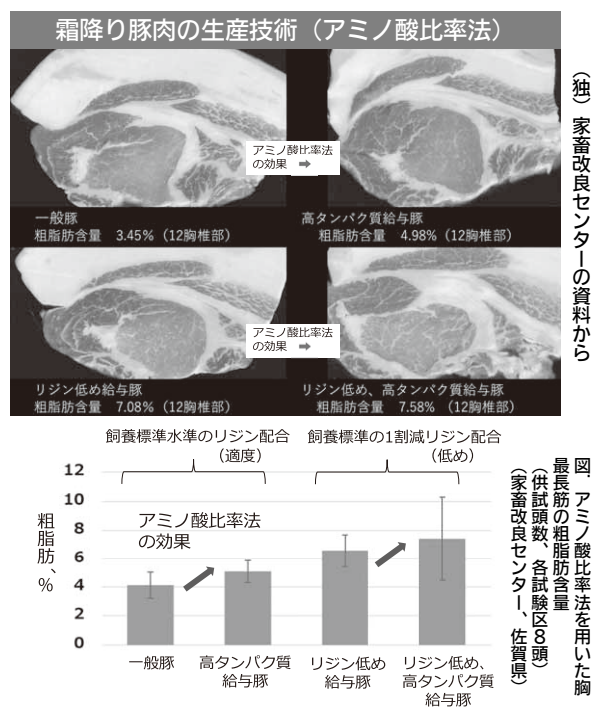
◇市販の配合飼料でも効果あり

アミノ酸比率法で飼養した豚肉は、脂肪交雑が向上した(写真、図)。市

販の配合飼料でも、アミノ酸比率法は効果があるという。なお、リジン/粗タンパク質比が0.03程度で、アミノ酸比率法は効果が発揮されるとのことだ。

同センターによると佐賀県の大規模養豚場での試験でも、アミノ酸比率法を用いるとロース粗脂肪含量が高くなったと紹介している。

消費者の嗜好性が高い豚肉を飼養する1つの方法として、アミノ酸比率法を参考にしたい。



(独)家畜改良センターの資料から

図 アミノ酸比率法を用いた豚(供試頭数各試験区8頭)の粗脂肪含量

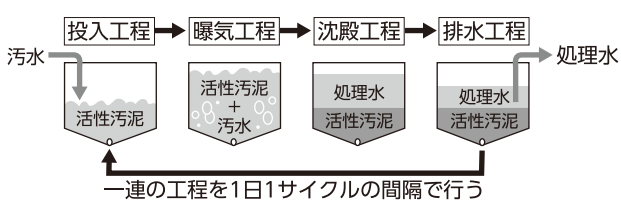
養豚 曝気槽運転を見直し電気代削減 適正な管理で水質も維持

様々な資材費の高騰が生産者を苦しめている。電気代削減の技術として、栃木県畜産酪農研究センターは、同

センター内の養豚排水処理施設の状況をモニタリングすることで、曝気時間の見直しを行い、電気代を削減できることを実証した。

■方法

同センターで導入しているのは、「回分式排水処理施設(図)」である。曝気槽内のpHやORP(酸化還元電位:測定対象液が酸化状態にあるか、還元状態にあるかを測る値)のデータ、平均飼養頭数などを解析し、曝気の削減が可能な時間帯で行った。



データの大幅なズレや曝気槽の異常がないことを確認しながら曝気時間を減らし、合計3時間の削減を実施した。

■結果

実証の結果、曝気槽内のpHやORPを指標として、曝気時間の適正な削減を行うことができた。排水処理の工程に大きな悪影響はみられず、削減できた電気代は表のとおり。

他の農場の養豚排水処理施設でも削減可能な曝気時間が潜在する可能性を示した。

試験の曝気時間総量による1カ月の電気代削減率	
変更前料金(曝気16時間/日)→31,151円/30日	1ヵ月で18.75%削減
変更後料金(曝気13時間/日)→25,310円/30日	

図・表などは栃木県畜産酪農研究センターの資料から

バニラの香りで闘争抑制 母豚へのスプレー噴霧で

今後、日本でもアニマルウェルフェアの観点から母豚の群飼いが普及する可能性がある。栃木県畜産酪農研究センターは、群編成時の闘争を抑制する方法について、検討を行った。

【先行調査と結果】

妊娠安定期の母豚4頭×4区の16頭を供試。試験区①は一斗缶を棒で叩く「聴覚」と試験区②~④は、②「バニラ:バニラエッセンス(原液)」③「ラベンダー:ラベンダー精油(エタノールと水を添加)」④「ハッカ油(同)」を、入室時及び闘争開始時に顔周りにスプレーボトルで噴霧する「嗅覚」とした。

有効性の比較は、豚同士の相性などによる影響を除いて比べるため、「抑制効果が認められた回数/抑制刺激を与えた回数=刺激の有効率(%)」で算出した。

その結果、バニラ香の有効率が83%と最も効果が高かった。



闘争中の豚にスプレー噴霧をする様子 栃木県畜産酪農研究センターの資料から

【反復検証でもバニラ香に効果】

バニラ香の検証に絞り、体格差がない血縁の豚2組の計4頭で試験を実施。次に、全頭血縁関係の3頭に4頭追加した7頭で反復試験を行った。

結果、1回目で83%、反復検証で85%と、バニラ香が闘争抑制に効果を示した。また、勝敗が決まらず闘争が終了した割合も、バニラ香の平均が92%と最も高かった。

バニラ香は群編成時の闘争緩和や負傷軽減に役立つとみられた。一方、力の差がある群編成での長期的ないじめは防げないため、群編成時には体格などに注意が必要となる。

甘草給与で増体や免疫力向上に効果 黒毛子牛 哺育期に給与で

黒毛種子牛の増体と価格の関係をみると、体重を向上させることで価格が高まる可能性が高い。しかし、体重が重くても過肥による低評価で価格が低下する牛もみられる。

そこで、福井県畜産試験場は、発育向上や疾病予防の効果が期待される「甘草」(天然ハーブの一種で、漢方薬や甘味料に使われる)を給与した場合の増体効果などについて検証した。

【試験方法】

試験は、県内で生産された和子牛(黒毛雌)16頭を生後6~13日齢で導入し、カーブハッチで飼養した。試験区分は、対照区(代用乳、濃厚飼料、粗飼料を給与)と甘草区(対照区と同様+甘草を給与)の二区とし、増体量、飼料摂取量、健康状態、血液生化学検査、腸内細菌叢について調査した。

試験期間は導入~離乳の約90日齢までとし、冬季と夏季各々の時期で比較するため、試験期間毎に対照区2頭、甘草区2頭(4頭×4回、計16頭)を

供試した。

代用乳は朝夕2回定時給与し、粗飼料はチモシー乾草の飽食とした。甘草抽出粉末は、20~40日齢は1g×2回/頭/日、70~90日齢は2g×2回/頭/日を代用乳に混ぜて給与した。

【試験結果】

甘草給与開始後、甘草区では対照区に比べ飼料摂取量が上回り、特に冬季において高く推移する傾向にあった(図1)。それに伴い、D.G.(日増体重)は甘草区が0.79kg/日、対照区が0.75kg/日と甘草区が対照区をやや上回り、体重差は甘草区が対照区に比べて

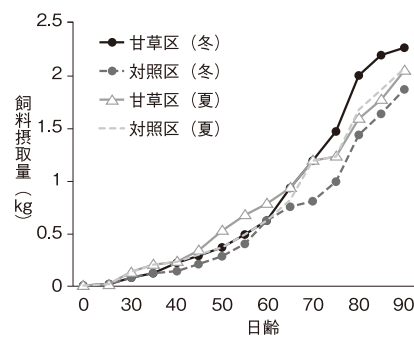


図1 哺育期における飼料摂取量の推移

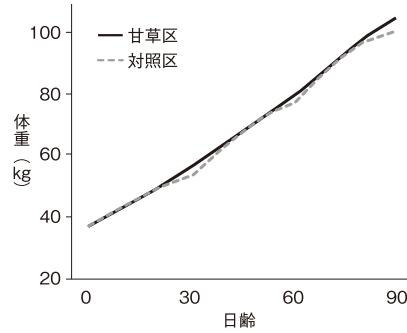


図2 哺育期における体重の推移

90日齢で3.3kg/頭上回る結果になった(図2)。

期間中、両区ともに下痢や肺炎等の疾病の発生は見られず、健康状態は良好だった。血液生化学検査成績においても両区に異常や差はみられなかった。免疫力向上が期待できる Bacteroides 菌(以下、同菌)群の腸内細菌叢に占める割合について、20日齢と90日齢を比較したところ、冬季導入の牛で対照区はほとんど変化しなかったのに対し、甘草区は3.4倍になった(図3)。

【まとめ】

同菌は、腸管での免疫機能を活性化させ炎症を抑える機能を持っており、オリゴ糖などの消化が難しい糖類を資化(栄養源として利用すること)させる。同試験場は、同菌が増加することで、免疫力の向上や、代用乳や飼料に

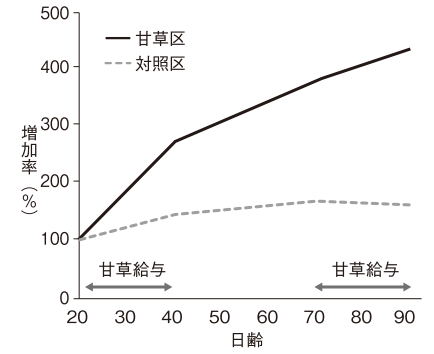


図3 Bacteroides 菌群増加率

図は全て福井県畜産試験場の資料から

含まれる糖類の利用度が高められたと分析している。これらから、哺育期における和子牛への甘草給与は、特に冬季において、育成期へのスムーズな移行に有効であると結論付けている。

なお、甘草の利用にあたって、留意事項を挙げている。今回使用した甘草は粉末状で、代用乳や飲用水に溶けやすいが、湿気に弱いので、湿気を避けて保存する必要がある。また、甘味成分がネズミや昆虫を誘引してしまう可能性があり、対策が必要だ。

濃厚飼料などに混ぜる場合、甘草抽出粉末は風などで飛散しやすいため注意する。代用乳に混ぜて給与する場合は、予め代用乳粉末と甘草抽出粉末をよく混ぜてからお湯で溶かすと、確実に摂取させられるとしている。

EU向け出荷ホスホマイシン不可 繁殖農家・酪農家にも影響

22年1月、EUは薬剤耐性菌対策を強化するため、輸入する畜水産物に対し、生産時の抗菌性物質の使用を制限する規則を制定した。日本をはじめとした、第三国に同規則が適用されるのは、26年9月3日からとなっている。

同規則では、「人の医療に使用が限定される抗菌剤リストに掲載されている動物用医薬品を使用しておらず、成長促進目的での抗菌剤の投与を行って

いないこと」が証明された畜水産物のみがEUへの輸入が認められる旨が規定されている。

日本では、家畜では主に子牛の肺炎や下痢症の治療薬として承認されている、ホスホマイシン(以下、同剤)という抗菌剤が規制対象となっている。EUとノルウェー向けに輸出する場合、同剤を一度でも投与した牛を由来とする牛肉は輸出することが出来なく

なる。

そのため、出生からと畜までの間に同剤を使用していないことを確認して証明する必要がある。なお、EUへの牛肉輸出を行う予定がある場合、肥育期間を考慮すると、最近の出生牛のうち一部は、出荷のころには規制対象に含まれることになる。

一部の酪農家市場では、すでに子牛への同剤使用履歴が電光掲示板で公表されているところもある。これに伴い、酪農家市場に子牛を

出荷する際などに、使用履歴がないことを確認したうえで、申告書の作成と提出を求められる場合がある。

同剤は、現場での利用は限定的で、代替薬やワクチンも存在しているた

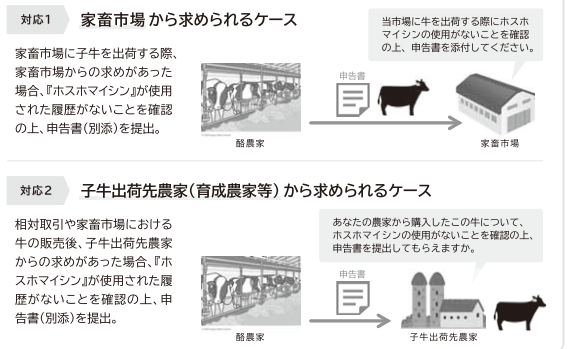
酪農家のみなさまへのお願い

EUにおける規則の変更に伴い、出生からと畜されるまでの間、『ホスホマイシン』という抗菌剤が投与された牛は、EU向けに輸出ができなくなります。このため酪農家市場や肥育農家から

- ①『ホスホマイシン』を使用していないことの確認
- ② 申告書(別添)の提出

を求められる場合がありますので、ご協力をお願いいたします。

ホスホマイシン不使用申告の対応の流れ



ホスホマイシンとは?

主に子牛の下痢症や肺炎の治療に用いられる抗菌剤であり、使用に当たっては獣医師の処方箋又は指示が必要です。なお、本剤については代替薬が存在します。

①診療獣医師への使用履歴の確認、②自農場に保管している処方箋・指示書等の確認により、ホスホマイシンが使用されていないことを確認の上、申告書(別添)の提出のご協力をお願いします。

農水省の資料から

め、影響も限定的と考えられるが、肥育農家のみならず、酪農家や繁殖農家も他人事ではないため、注意して対策したい。

乳用牛への黒毛和種交配36.3%に減少 性選別利用割合は増加

(一社)日本家畜人工授精師協会は、24年第2四半期(4~6月期)の「乳用牛への黒毛和種交配状況について(速報)」を公表した(下表)。

それによると、黒毛和種の交配割合

は、全国平均で36.3%と、前期(24年1~3月期)の38.4%から減少した。なお、性選別精液(乳用雌)の利用割合(全国平均)は24.2%で、前期より1.4%、前年同期より2.5%増加した。

地域	延べ人工授精頭数	黒毛和種授精頭数	黒毛和種の割合(%)	黒毛和種交配割合前期比(%)	黒毛和種交配割合前年同期比(%)
北海道	213,228	54,837	25.7	▲1.0	▲3.3
東北	7,294	2,867	39.3	▲1.0	▲3.9
関東	14,201	7,102	50.0	▲3.2	▲5.3
東海	4,498	2,920	64.9	0.6	▲1.5
北陸	808	469	58.0	4.2	▲3.6
近畿	3,391	2,194	64.7	▲1.3	▲0.4
中四国	2,901	2,171	74.8	▲1.8	▲1.1
九州	4,370	2,922	66.9	1.1	▲2.7
都府県	37,463	20,645	50.2	▲3.6	▲6.6
全国	250,691	75,482	36.3	▲2.1	▲4.9

(一社)日本家畜人工授精師協会の資料から作成

乳用種のみで発動 牛マルキン8月分

農畜産業振興機構は10月9日、肉用牛肥育経営安定交付金(牛マルキン)の交付金単価(24年8月分、概算払)を公表した。

乳用種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、交付が行われる。

肉専用種は43都道府県で発動した。

交付金単価(1頭当たり)は、乳用種が4万6922.6円(7月は4万2389.3円)となっている。

前月分と比べると、乳用種は販売価格に大きな値動きはないものの、素畜費や飼料費が増加したため、交付金は増額。交雑種は販売価格が大きく上昇したため発動はなかった。

「肉の高騰続いても買う」が3割超

肉の価格高騰に関する調査

共通ポイントサービス「Ponta(ポインタ)」を運営する㈱ロイヤリティマーケティングが、この度会員1000人を対象に「肉の価格高騰に関する調査」を行った。

「肉の価格が高騰していると感じるか」の問いに「とても感じる」が39.1%、「ある程度感じる」が42.8%で、合わせると81.9%が「感じる」と答えた(図1)。また、肉の価格高騰を感じている人に「どの種類の肉が最も高騰しているか」聞いたところ、「牛肉」が63.4%で最も多く、次いで「豚肉」が26.9%となった(図2)。

また、「肉の高騰が食費に影響しているか」聞いたところ、「とても影響している」「ある程度影響している」合わせて74.0%が「影響している」と回答している。肉の購入量を減らしたか聞いたところ、「減らしていない」が52.0%と、過半数を占めた。

一方、「価格高騰が続く場合の対応」については、「肉の購入量を減らす」が35.9%、「外食を控える」が33.7%となったが、反対に「特に対応はしない」と、これまでどおり変わらず購入をすると答えた人が31.7%にのぼった(図3)。

図1 肉の価格が高騰していると感じますか(牛肉・豚肉・鶏肉でお答え下さい)

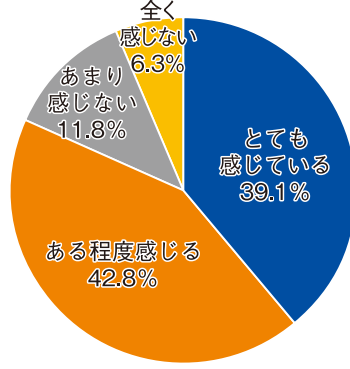


図2 どの種類の肉が最も高騰していると感じますか

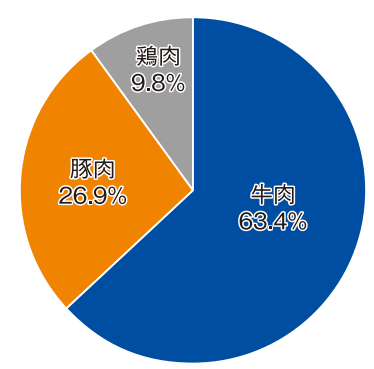
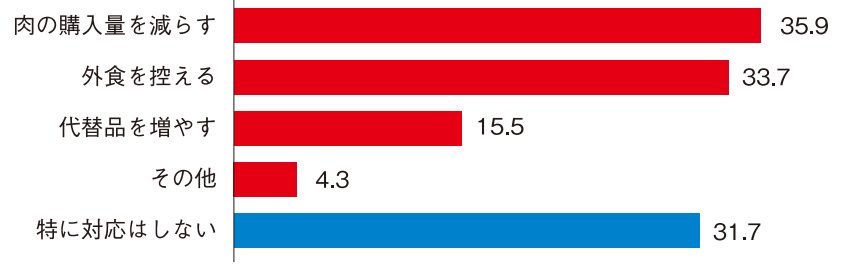


図3 肉の価格高騰が続く場合の対応(複数回答)



牛枝肉

行楽シーズンで各品種とも強もちあいの推移か

ようやく暑さが和らいできて、秋の行楽シーズンとなってきた。アウトドアや鍋の需要が伸びてくることを期待する。

和牛の急激な相場上昇はなさそうだが、乳用・交雑種ともに強もちあいの推移となりそう。

【乳去勢】9月の東京食肉市場の乳牛去勢B2の税込み枝肉平均単価(速報値)は、1078円(前年同月比145%)となり、前月より21円上がった。

10月になっても、代替え需要は続き、B2で1000円台の強もちあいが続いている。

【F1去勢】9月の東京食肉市場の交雑種去勢の税込み枝肉平均単価は、B3が1590円(同109%)、B2が1415円

(同113%)だった。前月に比べ、B3が26円、B2が18円それぞれ上昇。

10月になり、出荷頭数は増加傾向にあるが、B3で1500円台後半と、底堅い相場展開となっている。

【和去勢】9月の東京食肉市場の和牛去勢の税込み枝肉平均単価はA4が2066円(同100%)、A3が1892円(同105%)だった。前月に比べ、A4・A3ともにゆるやかな上昇となっている。

10月初旬までは、A4で2100円台の動きとなっており、今後も強もちあいの展開となるか。

【輸入量】農畜産業振興機構は10月の輸入量を総量で3万8500t(同96%)と予測。内訳は、冷蔵品1万5400t(同92%)、冷凍品が2万3100t(同98%)。冷凍品は現地相場高の影響で米国産の減少が見込まれる。

【出荷頭数】10月の出荷頭数は、和

牛4万3800頭(同99%)、交雑種2万5300頭(同113%)、乳用種2万7800頭(同98%)と、交雑種が前年を上回る出荷頭数となる見込み。

向こう1ヵ月の東京市場の税込み枝肉平均単価は、乳去勢B2が1000~1100円、F1去勢B4が1650~1750円、同B3が1500円台、同B2が1400~1500円、和牛去勢A4が2050~2150円、同A3が1950~2050円での推移か。

豚枝肉

出荷頭数は増加傾向だが、600円台は維持か

9月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物が665円(前年同月比96%)、中物は643円(同96%)となった。前月に比べ上物が100円、中物も99円それぞれ下がった。下旬になって500円台まで下落した。出荷頭数が徐々に回復してきており、動きはやや鈍くなったよう。

10月に入り、上物で600円台に回復してきた。輸入物の高騰もあり、国産へ

素牛

スモール価格が北海道以外でも下降傾向に

【スモール】9月の全国24市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳雄が1万6885円(前年同月比52%)、F1(雄雌含む)は8万7532円(同120%)と、前月に比べ、乳雄は4559円減、F1も8839円減と、前月に続いている下降となった。

乳雄・F1については、上場頭数が9月と同様の動きとなると見られ、頭数が過剰となる状況はもうしばらく続きそう。比較的高かった本州や九州の市場でも下降してきた。

【乳素牛】9月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の

畜産物需給見通し

の引き合いはまだまだ強く、これ以上の下落は無いと見られる。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、10月は143万頭(前年同月比100%)と、前年並み。猛暑の影響はもう少し続くともみられるが、出荷頭数は徐々に増加する傾向にある。

農畜産業振興機構

の需給予測によると、10月の輸入量は総量で8万3800t(同120%)と、前年より増加する見込み。内訳は、冷蔵品3万600t(同91%)、冷凍品5万3200t(同145%)。冷凍品は、価格優位性によるブラジル産のほか、米国・EUなどの輸入量の増加が見込まれる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が600~700円、中物も550~650円台で推移か。

取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が19万4211円(同101%)、F1去勢は30万5946円(同96%)だった。前月に比べ乳去勢は1774円上がり、F1去勢は1万2095円下がった。

乳去勢は、頭数の減少傾向がもうしばらく続き、強もちあいの展開が予想される。F1去勢も頭数減が続き、これ以上は下がりにくい。

【和子牛】9月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格(同)は、55万3185円(同100%)で、前月より1万2692円下がった。

和牛の枝肉相場は軟調が続いているが、今後は強もちあいが予想される。しかし、子牛価格の動きは強まらず、もうしばらくは弱もちあいの展開が続きそう。

9月の子牛取引状況

(頭、kg、円)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	481	445	317	312	193,578	195,175	611	626
	F1去	2,373	2,172	345	348	295,238	308,969	856	888
	和去	2,297	1,464	339	337	594,360	605,656	1,753	1,797
東北	乳去	2	1	184	211	16,500	35,200	90	167
	F1去	4	4	371	316	250,800	231,000	677	731
	和去	2,359	2,197	322	324	553,708	560,823	1,719	1,732
関東	乳去	40	21	244	290	265,128	283,067	1,087	976
	F1去	79	167	345	359	300,982	339,959	872	947
	和去	756	911	328	322	583,327	608,118	1,777	1,887
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	60	122	324	284	520,630	470,007	1,607	1,655
東海	乳去	-	2	-	203	-	69,850	-	344
	F1去	65	64	341	345	342,929	338,543	1,004	980
	和去	459	213	284	270	616,333	595,967	2,173	2,211
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	439	162	273	266	928,042	1,057,324	3,394	3,975
中四国	乳去	31	53	262	304	110,639	141,132	422	464
	F1去	256	267	336	336	330,137	342,314	983	1,018
	和去	702	788	308	311	520,853	529,279	1,694	1,700
九州・沖縄	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F1去	360	355	333	330	347,389	342,261	1,044	1,037
	和去	10,182	7,519	301	302	525,048	548,486	1,742	1,817
全国	乳去	550	522	308	310	194,211	192,437	631	621
	F1去	3,237	3,029	344	345	305,946	318,041	889	922
	和去	17,285	13,377	310	310	553,185	565,877	1,784	1,825

注：(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。